

タイトル	解放後朝鮮民衆の順応的心性
著者	水野, 邦彦; MIZUNO, Kunihiko
引用	季刊北海学園大学経済論集, 65(4): 93-100
発行日	2018-03-31

## 《論説》

## 解放後朝鮮民衆の順応的心性

水 野 邦 彦

韓国社会は、前近代朝鮮社会の土台のうえに成り立っているとはいえ、19世紀後半以降きわめて大きな〈力〉によって根柢的制約をとまなう〈枠〉に入れられた。それは主として、日本による侵掠ないし植民地支配の枠と、南北対立のなかでの親米反共の枠である。この2つの枠は1945年8月を期して分けられるように思われるが、じつは連続性のある枠でもある。

これらの枠が朝鮮半島もしくは韓国の社会における有無をいわさぬ枠となるが、その過程における、上から押しつける〈力〉と、それをなんらかのかたちで受け入れる人々の意識とのあいだの関連が、問われる。上から押しつける〈力〉はいわゆるイデオロギーをとまなうものであろうが、それにたいし人々が防禦的受動的な態度をとる過程、疑似国民的価値<sup>1)</sup>が生ずる過程、人々が知らず知らずに身につけている論理以前の順応的心性が、論点となる。これらは大枠でいえば社会意識ないし民衆意識にかかわる論点である。

上記の日本による侵掠ないし植民地支配の枠については、すでに旗田巍・梶村秀樹<sup>かん</sup>・姜徳相<sup>どくさん</sup>らをはじめとする学者によって数多の精緻な朝鮮近代史研究がなされており、それらをもって大概を把握できるであろう。本稿で

は、1945年8月以降の枠の形成過程を中心に、上からも横からも押しつけられるイデオロギーに防禦的受動的に順応する人々の心性を俎上にのぼし、この把握をこころみる。

## I. 解放後朝鮮の〈力〉と〈抵抗〉と〈歓喜〉

1945年の日本の敗戦は朝鮮の解放を意味した。「期せずして湧き上がった歓呼の声」「朝鮮人の心の中からほとぼしり出たこの歓び」「朝鮮人のあの熱狂」が朝鮮の津々浦々にこだました<sup>2)</sup>のは事実であろうが、8月15日を祖国が解放されたとは知らずに過ごした朝鮮人は多く、ソウルで解放が実感されたのは翌16日に5000余名が集まった中学校の運動場で呂運亨<sup>よういんげん</sup>の感動的な演説を聞いたときであり、その意味で「解放は夢のようにやってきた」という<sup>3)</sup>。

1945年8月15日以降の朝鮮半島では主としてあらたな独立民族国家形成がはかられ、国家形成の過程は形式的には1948年8月15日の大韓民国樹立までつづくが、この時期は韓国で一般に〈解放3年史〉とよばれる。長いあいだ他民族に支配されるという辛酸をなめ、朝鮮民族は自民族の結束と独立に渴えて

\*印は日本で発行された文献である。

1) 曹喜昞『韓国の国家・民主主義・政治変動』當代、1998年、94頁をみよ。

2) \*B. カミングス／鄭敬謨ほか訳『朝鮮戦争の起源』第1巻、影書房、1989年、115-6頁をみよ。

3) 徐仲錫『韓国現代史』熊津、2005年、21頁をみよ。

いたはずであるが、間断なく政治的出来事がつづく解放空間〈解放3年史〉は朝鮮民族に統一国家指向の民族主義のありかたを「反省する契機をあたえず」、過去の朝鮮民族のありかたや民族主義のありかたを「清算しないまま分断と冷戦体制が南北朝鮮それぞれの社会構造を特定してゆくしかなかった」という結果をもたらした<sup>4)</sup>。

統一民族国家形成を期す民族意識はとうぜん植民地支配下で昂まっていたが、解放を機にこの民族意識を束ねてあらたな国づくりに向かう間もなく、朝鮮半島は米軍とソ連軍とに圧迫されはじめた。そこには米国をめぐる朝鮮民族の誤まった状況認識があった。すなわち米国は、朝鮮の「民族自決を制約する条件」、つまり朝鮮民族自決の阻害要因とはみなされず、「施惠的なものとしての8・15解放をもたらしてくれた解放者と受けとめられていた」し、さらに朝鮮戦争をへても「米国の援助は民族主義的な民衆の覚醒を遅らせる効果を発揮したのである<sup>5)</sup>。

そもそも〈8・15解放〉は「民族解放運動勢力の力で勝ち取ったというより、帝国主義列強間の戦争の副産物という側面が大きかった<sup>6)</sup>」ことが歴史家によってすどく指摘されている。それは「アメリカとソ連を二本の軸とする世界秩序の再編過程で『与えられた』ものであった」がゆえに、朝鮮民族の独立国家樹立にかんする「自主的決定は大きく制約されることになった」といわざるをえない<sup>7)</sup>。これは一見すると、敗戦後日本の民主

主義が勝ち取った民主主義でなく「負け取った」民主主義である<sup>8)</sup>とか、敗戦後に取りこまれた思想は「配給された思想」(河上徹太郎)であり、民主化は「あたえられた民主化」(福武直)であるとか揶揄される構図と類似するように思われるが、日本の現象は思想的局面での現象であり、朝鮮の現象は政治的局面での現象であるという相違がある。すなわち〈8・15解放〉が朝鮮人の民族解放戦争によって勝ち取られたものでなく米ソの世界秩序再編過程であたえられたものであったというのは、朝鮮民衆の意思をこえた国際関係の力学のなかで戦争が終えられ朝鮮が植民地支配から解放されたことを示す、政治的局面での現象とみなされる。朝鮮の思想的局面についていえば、解放後朝鮮南部を管理していた米軍政庁が1万人の朝鮮人にたいしておこなった「資本主義・社会主義・共産主義のうち、どの体制がよいか」という輿論調査で、資本主義との回答が13%、社会主義との回答が70%、共産主義との回答が10%であったという、今日では考えられない結果が示されており、現代韓国を代表する進歩的政治学者の孫浩哲<sup>9)</sup>はこの思想状況を〈左傾半分地形〉とよぶ<sup>9)</sup>。植民地解放の思想的論拠として朝鮮には社会主義や共産主義の思想が日本以上に浸透していたと考えられるであろう。けれども植民地朝鮮にそれらの思想が深く浸透していたぶん、解放後南部の米軍政による締めつけはきびしいものであった。その締めつけによって〈左傾半分地形〉は米軍政下および朝鮮戦争期をつうじて〈右傾半分地形〉につくりかえられてゆく。

植民地時代から朝鮮人のあいだに社会主義を支持するか反共指向に掉さすかという対立

4) 曹喜暎『韓国の国家・民主主義・政治変動』87頁をみよ。

5) 朴玄塚「分断時代韓国民族主義の課題」『朴玄塚全集』第4巻、図書出版へみる、2006年、466頁、468頁をみよ。

6) 姜萬吉編『韓国資本主義の歴史』歴史批評社、2000年、200頁。

7) \*韓国民衆史研究会／高崎宗司訳『韓国民衆史近現代篇』木犀社、1998年、307-8頁をみよ。

8) \*松本重治『国際日本の将来を考えて』朝日新聞社、1988年、22頁をみよ。

9) 孫浩哲『現代韓国政治 理論、歴史、現実、1945-2011』イマジン、2011年、216頁をみよ。

があった。両勢力の対立は解放後いっそう直接的に外国の両陣営との結びつきを深め、〈解放3年史〉においてより露骨に対決姿勢を強めていった。両勢力はおのおの地域的ヘゲモニーを有しており、南半部においては親米反共の色彩が濃く、社会主義支持者は暴力にさらされることが多かった。つまり南半部では親米反共が〈力〉となり、それに同調しない人々を攻撃したのである。

敗戦直後日本の思想状況の骨格をつくったのは〈力〉と〈認識〉と〈虚脱〉という三者の力学的関係であったことが日高六郎の分析によって描き出されている。すなわち、有無をいわずに上から覆いかぶさるGHQの〈力〉、マルクス主義的歴史観にもとづいて示される知識人の〈認識〉、敗戦による生命の安堵とともに疲労・絶望・沈滞・喪失のような精神的崩壊感をともなう民衆の〈虚脱〉が、敗戦後日本の空気となったのである<sup>10)</sup>。この日高六郎の分析は、敗戦後の社会意識のありようを見極めるうえでも大きな意義を有するが、それはまた解放後朝鮮民衆の社会意識を考察するさいにも生かされるように思われる。これになぞらえていえば、さしあたり解放直後朝鮮の思想状況の骨格をつくったのは〈力〉と〈認識〉と〈歓喜〉という三者の力学的関係であったようにみられるかもしれない。ただし解放直後朝鮮における〈力〉とは、治安維持法廃止や言論の自由を指示してくるGHQの「民主的」な力ではなく、反共の旗幟を鮮明にした米軍政による、つづいて米軍政によって仕立てあげられた李承晩政権<sup>いすんまん</sup>による、強圧的な力であった。また解放直後朝鮮における〈歓喜〉とは、歴史の必然性や戦争の意味の〈認識〉から切りはなされた、思想性のない歓喜でもあった。そして解放直後朝鮮におけるこれら三者の力学的関係を制した

のは、親米反共支持を強要する米軍政および李承晩政権の〈力〉である。

〈認識〉は、解放後朝鮮においてはたんに歴史の必然性や植民地支配の意味を理解する静的な〈認識〉というより、植民地時代より隠然とつづけられてきた社会主義者たちの動的な〈抵抗〉というべきものであろう。社会主義者たちはたんなる抵抗というより、社会主義国家建設に向けた社会運動・政治運動ないし革命を意図していたであろうが、結果としてそれが植民地朝鮮において優位に立つことはなく、つねに朝鮮総督府の支配勢力に押さえつけられてきたため、ひたすらそれにたいする抵抗をつづけるしかなかった。じっさい朝鮮共産党や南朝鮮労働党のような社会主義勢力・共産主義勢力は〈力〉によって徹底的に排除されつづけた。

こうして敗戦直後日本の思想的力学にかんして日高六郎が示した〈力〉と〈認識〉と〈虚脱〉という骨格は、解放後朝鮮においては、〈力〉と〈抵抗〉と〈歓喜〉に置きかえられるであろう。解放後朝鮮固有の〈抵抗〉と〈歓喜〉のうえに、日本における以上に強権的で圧倒的な強さをもった〈力〉がおおいかぶさり、朝鮮人たちの生を支配したのである。朝鮮共産党や南朝鮮労働党は〈力〉によって徹底的に排除された。

## II. 朝鮮戦争の「直接的な経験」

1946年9月に50万余名が加わって起こったゼネストは、南の体制を麻痺させるほど大規模なものであった。人民委員会破壊、親日警察・官僚優遇、強制的食料供出など、そのかんの米軍政政策にたいする大衆の反感が、このゼネストを機に噴出し、大衆の爆発的闘争は10月いっぱい全国を覆った。このときの一連の闘争は〈10月人民抗争〉もしくは〈10月抗争〉とよばれ、100万にのぼる民衆が加わり、約2000人の死者を出したという。10月人民抗争はたんなる暴動ではなく、丁<sup>ちようん</sup>

10) \*日高六郎「戦後思想の出發」『戦後思想と歴史の体験』勁草書房、1974年、56-58頁をみよ。

海龜<sup>へいこ</sup>の精緻な研究によれば、日本植民地下の社会構造・政治構造が解放とともに改められねばならなかったにもかかわらず、解放後もそのまま維持され、再建されたことにたいする抗争であった。それは米軍政にたいする抵抗、保守的・反動的勢力にたいする抵抗であったが、この抵抗の主体は変革勢力の中央指導部ではなく、地方の献身的な左翼と民衆であった。10月人民抗争は、左翼弾圧にたいする朝鮮共産党の戦術とかかわりがあるという以上に、変革を指向する“民衆”ないし“人民”の抗争だったのである<sup>11)</sup>。

その後、米軍政の意向を受けて南半部だけで右派政府を組織し国家を樹立するための総選挙、いわゆる単独選挙が1948年5月におこなわれることになり、米軍政および李承晩に批判的で単独選挙を拒否しようとする風潮の強い済州島<sup>ちよしゅうとう</sup>では、朝鮮本土からやってきた狼藉集団・西北青年団や警察らの右派勢力が島民を暴力で押さえつけて投票所に向かわせようとしたが、それに抵抗する島民有志が山にこもり、4月3日未明に武装蜂起して右派勢力にたいする反撃に出た。これは4・3蜂起とよばれるが、右派勢力は蜂起した武装住民やその家族らにたいする過剰なまでの鎮圧を加え、さらには武装住民の出身集落全体を焦土化する暴挙をくりかえし、4・3蜂起は6年あまりつづく「4・3事件」になった。この4・3蜂起鎮圧のために朝鮮本土から済州島に派遣される軍隊に所属して港町・麗水<sup>よすい</sup>で待機していた軍人の一団が麗水と順天で叛乱を起こし、麗水順天叛乱とよばれる1948年10月のこの出来事で約1万人の死者が出た。10月人民抗争、済州島4・3事件、麗水順天叛乱だけで数万人の人々が殺されたのであり、「これが米軍政三年間の業績だ。

11) 金仁杰『韓国現代史講義』とるべげ、1998年、67-68頁、丁海龜『10月人民抗争研究』よるむ社、1988年、202-204頁をみよ。

その屍の上に李承晩政権が作られた」という把握<sup>12)</sup>、大韓民国とは「アメリカの強権によって人民の犠牲の血の上に作られた虚構の国」にほかならないという把握<sup>13)</sup>にも相応の根拠がある。さらに麗水順天の叛乱軍人たちの一部は智異山中にこもって韓国政府に抵抗するパルチザンとなり、のちの朝鮮戦争において韓国軍と対峙した。

解放後朝鮮に上からはたらいだ〈力〉は「市民の日常的な生を窒息させるかのように締めつける力<sup>14)</sup>」として身近な場で発揮されたが、より鮮明な行使は、朝鮮戦争においてあらわれた。朝鮮戦争では南側の韓国軍(国連軍)と北側の人民軍(共産ゲリラ、パルチザン)とが戦闘をくりひろげ、相争って朝鮮半島各地の掌握をめざした。朝鮮戦争が始まると南半部=韓国の国民はすべからく「反共国民」であるべしという強要が一層つよまり、「反共国民」と「左翼」との対立構図がつくられた。この対立は、植民地朝鮮において日本人に同化しようとしてつとめた「皇国臣民」と日本人に抵抗した「民族解放運動勢力」との対立が初期冷戦的政治環境のなかで姿を変えたものであると社会学者の金東椿<sup>きんとうちん</sup>は論ずる<sup>15)</sup>。反共と左翼との対立はすなわち南の政府の正統性をみとめ自由陣営に同調するのか、北の政府の正統性をみとめ共産陣営に同調するのか、という対立の構図であり、朝鮮戦争という尖鋭化した状況のなかで人々はこの二者択一を迫られ、冷戦の論理が大衆の意識のなかに一定の基盤をもつことになる<sup>16)</sup>。とう

12) \*趙廷來『太白山脈』第V巻、尹學準監修、ホーム社、2000年、390頁をみよ。

13) \*金石範『火山島』第V巻、文藝春秋、1996年、340頁をみよ。

14) \*崔章集/中村福治訳『韓国現代政治の条件』法政大学出版局、1999年、148頁。

15) \*金東椿/拙訳『近代のかけ』青木書店、2005年、183-8頁をみよ。

16) 曹喜昞『韓国の国家・民主主義・政治変動』90頁をみよ。

ぜん二者択一が各人の自由にゆだねられていたわけではなく、凶暴な外的制約のもとで一方を選択するよう強力に誘導された。左翼とかかわりがあるとみなされた人々は「国民」であることに嫌疑をかけられないように徹底して沈黙したが、この人々はおおむね1980年まで事実上「国民」としての資格を奪われ、賤民あつかいされ、さらには人間以下の処遇を受けたという<sup>17)</sup>。このように「既成事実として受け入れられ、反共の名のもとに正当化される」<sup>18)</sup>南半部の社会的状況は、解放から朝鮮戦争にいたる期間につくられた。この期間をつうじて南半部に定着した特殊な極右共同体的状況を社会学者の曹喜昞は〈反共規律社会〉と命名する。反共は、一切の価値を超越し圧倒するものとして社会生活のなかで不断に確認され、社会生活をとおして絶え間なく再生産されて〈疑似国民的価値〉に拡大してゆく。反共が大衆を統制し規律化する条件、つまり大衆の内面において自己検閲 (self-censoring) 機制として作用する条件が用意された社会が〈反共規律社会〉なのである<sup>19)</sup>。

こうして共産主義は南半部＝韓国において、すくなくとも優位を占めることはなかった。それは敗戦後日本のマルクス主義とおなじく解放後朝鮮においても国民を全体的にとらえられなかったのである。日本人の心理的感覚において敗戦が解放であったとしても、そこで日本人が思想的に変貌したとはいいがたく、敗戦の前も後も民衆の生活のなかに根づいていたのは処世智や世渡り術という庶民的発想法であった<sup>20)</sup>のに似て、朝鮮人も、解放後朝鮮の〈力〉のもとで思想的変貌をとげるいとまもなく、朝鮮戦争休戦にいたる〈解放8

年史〉のなかで自己の生命維持を優先せざるをえなかったのである。

南北あわせて400万人もの犠牲者を生んだ朝鮮戦争の極限状況において、人々の意識のなかでいったいなにが起こっただろうか。小さな村落に住む読み書きもままならない数多くの人々にとって、政治や主義主張がどこまで意味をなしただろうか。朝鮮戦争が始まると、米国に後押しされた韓国軍と、のちに中国に後押しされることになる人民軍とが、朝鮮半島のあちこちの村落を競って支配下におさめていった。村が韓国軍の天下となり人民軍に協力した村人が処断されたかと思えば、あくる日には人民軍が韓国軍を駆逐し韓国軍にとらえられていた村人を解放して逆に韓国軍協力者や警察関係者を処断するという出来事がしばしば起こった。村にやってきた韓国軍を人民軍と勘違いして人民旗を掲げて殺されてしまった村人もあった。「昼は大韓民国、夜は朝鮮民主主義人民共和国」という当時の言葉は、朝鮮半島の村落におよんだふたつの支配勢力がめまぐるしく入れ替わった状況を象徴している。「昼は大韓民国、夜は朝鮮民主主義人民共和国」のありさまが悲惨なたちで表現されたのが、韓国軍によって719人の住民が集団殺害された居昌良民虐殺であった。

村落の住民にとってみずからの政治的立場を沈思したりイデオロギーを云々したりする余力はなく、住民はただ「命を保つために、こちらに付いたり、あちらに付いたりして、ひっそりと命をながらえて生きのびるしかなかった」<sup>21)</sup>。いうなれば「どんなやり方でも順応することだけが命をまともに保存することの出来る道であったし、そういう、権力行使に対する沈黙と従順が確実に生き残りのための戦略の一つとして受容されざるをえない

17) \*金東椿『近代のかけ』187-8頁をみよ。

18) 朴玄塚「分断時代韓国民族主義の課題」472頁。

19) 曹喜昞『韓国の国家・民主主義・政治変動』92-5頁をみよ。

20) \*日高六郎『現代イデオロギー』勁草書房、1960年、261頁をみよ。

21) \*金源一／尹學準訳『冬の谷間』栄光教育文化研究所、1996年、93頁。

時代だった<sup>22)</sup>のである。大半の民衆は「自分の生命維持をはかるのに汲々としていた」のであり「まさしく生存の論理を内面化」していたという金東椿の簡潔な把握は的確である<sup>23)</sup>。こうして形成された反共の精神風土は「思想的由来のない極右的政治地形」<sup>24)</sup>ともよばれる。

論理以前の経験は、朝鮮戦争を描いた文学作品でつぎのように語られている。

……“恨”とは何でしょう。それは……(中略)……怒りと悔しさと怨恨が積もり積もった感情でしょう。それはほかでもない、抑圧され搾取されて生きてきた人々の体験と精神の凝縮なのです。言い換えれば、支配されてきた者同士にのみ通じる思想なのです。ただ、それが政治的なイデオロギーと違う点は、体験的な思想の凝縮であって、分析的な理論化や実践的な論理化ができなかったという点です<sup>25)</sup>。

ここでいわれる体験とは、言葉によって論理的抽象的に表現されえず、普遍的説得力をもちえない経験、当事者の実感によってのみ媒介される経験であろう。この種の経験によって形成された信念について政治学者の崔章集はつぎのように書き、そのイデオロギー形成作用を論じている。「朝鮮戦争が韓国社会に与えたもっとも大きな結果は、国民の心性に及ぼした衝撃である」が、その衝撃は戦争の残酷なさまを個々人に知らしめる「直接的な経験」であり、この直接的経験を

つうじて人々の心の底に「共産主義を憎悪する意識」が植えつけられる。これはいわば国民全体に「順応的心性を植えつけるイデオロギー的教化作用」であり、それによって国家エリートは「ほぼ無制限の強権を行使できる正当性」を手中におさめ、「反共イデオロギーが正当性を獲得する」にいたる<sup>26)</sup>、と。

### Ⅲ. 論理以前の〈順応的心性〉

政治的物理的な極限状態という有無をいわさぬ経験のなかで「自分の生命維持をはかるのに汲々としていた」民衆は、論理以前の〈生存の論理〉を内面化し、「権力行使に対する沈黙と従順」によって生きかたを律せざるをえなかった。この人々がなんらかの立場に同意するとしても、その同意は「暴力的圧迫ではない完全なイデオロギー的浸透による」能動的同意とは異なり、「戦争の理念にたいする被害意識・恐怖意識にもとづく防禦的で受動的な」同意、すなわち「国家の暴力的圧迫にたいする被害意識にもとづく」受動的同意であったといえる。受動的同意とは「直接的な経験」として身をもって味わった「衝撃」のような「暴力的圧迫」によって成り立つが、朝鮮民族が近代に経験したその極北が朝鮮戦争である<sup>27)</sup>。

朝鮮戦争の経験は「論理以前のもの」として「譲歩できない、確信に近い信念」「生存の論理」を朝鮮民族の心中深くに固著させ、問答無用で人々に「順応的心性を植えつける」ものであった<sup>28)</sup>。姜禎求のいう「思想的由来のない極右的政治地形」を可能ならしめたのもこのような論理以前の順応的心性であり、「思想的由来のない」ありさまとは能

22) \* 文京洙『済州島現代史』新幹社、2005年、74頁。

23) \* 金東椿『近代のかけ』122、124頁をみよ。

24) 姜禎求『現代韓国社会の理解と展望』圖書出版はぬる、2000年、231頁。

25) \* 趙廷來『太白山脈』第Ⅶ巻、尹學準監修、ホーム社、2000年、307頁。

26) \* 崔章集『韓国現代政治の条件』11頁をみよ。

27) 孫浩哲『現代韓国政治 理論・歴史・現実 1945～2011』217頁、221頁をみよ。

28) 金東椿『韓国社会科学のあらたな模索』創作と批評社、1997年、79-80頁、\* 金東椿『近代のかけ』122頁をみよ。

動的同意の欠如を示すものである。

このような受動的同意は曹喜昞のいう〈反共分断意識〉を助長させ、「反共分断意識の過剰社会化」によって〈反共規律社会〉が形成されるにいたる<sup>29)</sup>。心身に圧迫を受けた人が理念や道徳や思想とは関係のないところで事柄を身体的感性的に受けとめ、その事柄に抵触する立場を排除する受動的同意は、こうして反共規律社会をささえる基盤となる。解放後朝鮮の〈生存の論理〉を内面化する意識には、跋扈する政治的な反共イデオロギーが物理的な力をもって作用していたといえる。

解放後朝鮮の〈歓喜〉は認識や思想性を缺いたところに沸き起こったものであり、〈歓喜〉の主は不幸にして教育を受けられなかった多くの朝鮮民衆であった。この民衆にとって自己の政治的信念や主義主張は縁遠い存在であり、外部から加えられる〈力〉によるイデオロギーの教化が比較的容易に民衆に浸透することになる。単純に図式化していえば、民衆の〈歓喜〉が、米軍政の〈力〉と社会主義者の〈認識〉との双方に引き寄せられるのである。〈力〉と〈認識〉とは対立し互いを否定する。

そのため〈左傾半分地形〉がたちまち〈右傾半分地形〉に組みかえられることが起こる。ことは、その地に住む人々の意識におよぼされるイデオロギーにかかわる。親米反共は大韓民国建国以来の国是といえるが、これは強圧的手段をもって〈疑似国民的価値〉に拡大してゆく。

これらは、さきに崔章集にそくしてみたように、反共イデオロギーが正当化される過程ともいわれる。すなわち朝鮮戦争の衝撃は、人々の直接的経験として心の底に「共産主義を憎悪する意識」を植えつける「イデオロギー的教化作用」として機能し、反共を正当

化するのである。

イデオロギーはしばしば観念形態と訳されるが〈観念を構造化する形態〉(渡辺憲正)ととらえるほうが適切であろう。石井伸男によれば「日常を処する生活態度が律せられるのは、経験によってであり、このような経験的意識形態は、『常識』とよばれる」。ここでいう経験的意識形態は自然発生的であり、それと異なる目的指向的な意識、意図的な誘導をふくむ意識がイデオロギーであるが、この両者はそれぞれ社会意識における自然発生的要素と目的意識的要素とを体现する。イデオロギーは系統的な世界認識や「特定の価値体系」を表明し、とりわけ支配階級のイデオロギーは当該社会の「経済的・政治的支配をささえる手段」となる<sup>30)</sup>。解放後朝鮮においては跋扈する反共イデオロギーが物理的な力をもって政治的支配を支え、民衆に〈生存の論理〉の内面化を強要していたといえる。

〈観念を構造化する形態〉として他の人間と共通した思考形式をつくりだすものとみなすかぎり、イデオロギーは体制側にも反体制側にもかかわる。それは、みずから永遠の真理だと思いこんで現実の物質的生活を統禦し、支配に加担したり抵抗を組織したりするにいたる。それどころか「いかなる理論もそれが(大衆的)イデオロギーに翻案されないかぎり物質的力と社会的運動になりえない<sup>31)</sup>」とさえいえる。大西巨人が「思想理論家」に「イデオログ」とふりがなを附した<sup>32)</sup>のは示唆的である。

イデオロギーそのものは、たとえば社会主義や反共主義のように、一定の型をなして洋の東西を問わずいたるところに出現した。論

29) 曹喜昞『韓国の国家・民主主義・政治変動』94-95頁をみよ。

30) \*石井伸男『社会意識の構造』青木書店、1986年、86-102頁をみよ。

31) 孫浩哲『転換期の韓国政治』創作と批評社、1993年、27頁。

32) \*大西巨人『神聖喜劇』第二卷(第三部第一)、光文社、2002年をみよ。

点の核心は、いわゆるイデオロギーというより、論理以前の順応的心性にあるのではないか。個々のイデオロギーの是非よりも、おのおのの地で人々がイデオロギーを受容する過程や受容する心的構造が注目されてしかるべきである。この受容する心的構造とは、朝鮮戦争時の居昌虐殺のごとき殺戮の恐怖を間近に感じながら「自分の生命維持をはかるのに汲々として」「まさしく生存の論理を内面化」する心的圧迫のほか、思想的由来のないイデオロギーや本人が同意しないイデオロギーを人々が受容する仕組み、丸山眞男のいう「国民の心的傾向なり行動なりを一定の溝に流し込むところの心理的な強制力」を意味するであろう。この強制力はさしあたり「なまじ明白な理論的構成を持たず、思想的系譜も種々雑多であるだけにその全貌の把握はなかなか困難である」といわざるをえない<sup>33)</sup>が、この受容の仕組み、「心理的な強制力」は、まぎれもなく〈論理以前の順応的心性〉に重なりあうものといえ、おそらくそれは長いものに巻かれる集団同調主義にきわめて近いものである。

### 結びにかえて

朝鮮半島において、1945年8月以前に上から〈力〉によってあたえられた植民地支配の〈枠〉と、1945年8月以降に上から〈力〉によってあたえられた親米反共の〈枠〉とは、金東椿の洞察に示されたように、連続性ないし継承性をもつものであった。すなわち、植民地朝鮮において日本人に同化しようとしてめた「皇国臣民」の枠が、解放後は南半部＝

韓国の国民に強要された親米「反共国民」の枠に受け継がれ、植民地朝鮮において日本人に抵抗した「民族解放運動勢力」は「左翼」勢力に連なっている。朝鮮民衆は従順にこの系譜の〈枠〉におさまるように強要され、また民衆みずから受動的防禦的にこれにしたがった。

論理以前の〈順応的心性〉ないし集団的同調主義は、朝鮮固有のものではなく、日本にも古くからみられるものであった。理を盡くすより共同体的なれあいを選ぶ集団同調主義は、たとえば「わが日本の人、究理を好まず<sup>34)</sup>と司馬江漢がしるしたように、古くから日本社会の根に息づいている思考様式である。

おそらく朝鮮半島の精神風土と日本の精神風土とのあいだには相当な類似性ないし共通性がある。それは、上から押しつける〈力〉、社会における有無をいわさぬ枠を、共同体的なれあいのもとに、なんらかのかたちで人々が受け入れる意識的土壌を示唆する。社会の軋轢からみずからを防禦するために受動的で同調的な態度をとるという論理以前の順応的心性が、朝鮮半島においても日本においても、知らず知らずに人々の身についているように思われる。

日本におけるこの種の順応的心性としては、竹内芳郎が示した〈神道的精神風土〉〈粘着的精神風土〉という概念が的を射ている<sup>35)</sup>。これらとの異同に留意しつつ、朝鮮半島における集団同調主義的・なれあいの・順応的心性の概念化がこころみられなければならないだろう。

33) \*丸山眞男「超国家主義の論理と心理」『増補版 現代政治の思想と行動』未来社、1964年、12頁をみよ。

34) \*司馬江漢「春波樓筆記」『司馬江漢全集』第2巻、八坂書房、1993年、70頁。

35) \*竹内芳郎『イデオロギーの復興』筑摩書房、1967年、10頁、\*同『実存的自由の冒険』季節社、1975年、381頁をみよ。